

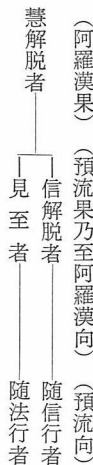
説一切有部の修行体系における信の一面

兵藤 一夫

信 (śraddhā) と慧 (prajñā) は仏道における根本的な二つの要素であり、原始仏教(阿含・ニカーヤ)以来さまざまに説かれている。一般的には信は情意的で慧は理知的であると考えられるが、両者には密接な関係があり、一方が深まることによって他方が生じたに深まったりもする。そして或る面では両者の相即も考え得る。そうした中で、原始仏教における信と慧の関係や意義は、すでに舟橋一哉博士『原始仏教思想の研究』(特に一六三―二二八頁)や藤田宏達博士「原始仏教における信の形態」(北大文学部紀要 No. ⑨)などのすぐれた研究によってほぼ明らかにされている。そこで、ここではそれらに基づきながら、原始仏教以後のアビダルマ仏教、特に説一切有部の修行体系の中で信が如何に位置づけられているかを、慧との関わりにおいて若干考察してみたい。その際、主として随信行者 (śraddhānusārin)、随法行者 (dharmaṇusārin)、信解脱者 (śraddhāvīnutka)、見至者 (dṛṣṭipāpa) という語を一つの手掛りとしていくことにする。それらの語の解釈の中に有部の信の理解の一面が出ているからである。

すでに指摘されているように、原始仏教では預流(後のアビダルマの用語では見道)の獲得に関して二通りのあり方が示されている(MN ii, pp. 478-479)。一は主として信によるもの、他は主として慧によるものである。それらはそれぞれ随信行者↓信解脱者、随法行者↓見至者という形に配当し得る。このようにして預流を

得た者がさらに一切の漏を断じると、どちらも慧解脱者 (prajñā-vīnutka) となるのである。従って、預流の獲得に関して二つのあり方が区別されているとしても、そこには預流に至る手段の差異が示されているだけで、両者に根本的な差異は見出されず、しかも預流獲得後は全く区別されていない。以上を図示すれば次の如くである。



パーリアビダンマでは原始仏教におけるこの二つのあり方がほぼそのまま受継がれていくが、有部においては可成りの手直しが見られる。それは最終的には修行階程の体系化と密接に関連してくるのであるが、ひとまず有部の論書に沿って当該問題を見ておく。

先ず『集異門足論』(大正26・435b)ではこの二つのあり方を仏道修行者の生来の性質の違いとして把える。すなわち、随信行者は生まれつき信や愛や随順や勝解する性質に富み、思量や観察などを好まない。随法行者はその逆である。前者は仏やその弟子の説法を聞き、四諦の義は真理であると確信して修行を始め、修所成の慧に基づく聖道を修して見道を得るのである。一方、後者は説法を聞いた後、自ら四諦の義を思惟観察し、それが真理なることを知って修行を始め、随信行者と同様にして見道を得るのである。ここで注意して置きたいことは、仏道修行者をその生来の性質によって二つに分けてはいるが、それは仏教こそが真理であるとして実際に仏道の修行を始めるきっかけを区別しているにすぎないのであって、見道獲得の具体的な手段(道)は両者とも修

所成の慧に基づく聖道（具体的には四念住を中心とした四善根）なのである。

この考え方は『大毘婆沙論』（大正27・278a）でもほぼ踏襲されているが、ここでは新たに一つの重要な問題が加えられている。それは阿羅漢の退・不退の問題である。有部では阿羅漢を二つに分け、一方は阿羅漢位から退することがあると考える。この問題は『大毘婆沙論』において初めて本格的に詳細に議論されてくるが、この検討の過程の中で、退を起す阿羅漢の資質が問題とされ、一部では前述の随信行・随法行者との関わりが指摘されている。このような『大毘婆沙論』に見られる如きの議論を受けて、『阿毘曇心論』においてこの問題の新たな展開が見られるのである。

さて、『阿毘曇心論』において有部の修行階程が初めて一貫したものに体系化されるのであるが、その大きな契機となったのは、これまでの仏道における信と慧による二つのあり方を機根の鈍と利に基づくものとして把握したことであった。この場合、鈍根と利根とは仏道修行者の生来の理解能力に関して言われているようであり、信と慧では慧に比重を置いた把え方である。この考え方はすでに『大毘婆沙論』において見られるが、ここでは未だ主流の学説とはなっていない。しかし、内容的には先に紹介した『集異門足論』以来の随信・随法行者の把え方と一脈通じるものがあり、その意味では全く新たな考え方ではない。ただ、これにより原始仏教以来の信と慧によるという異った二つのあり方を慧に比重を置いた一つの能力の鈍・利という、程度の差としてのもの置き換えることによって実質的に一本化したのである。さらにな

た、この機根の鈍・利を採用することによって、修行階程に関する重要な問題も解決されるのである。アビダルマ的分析が進められていく中で、修行階程、特に見道以後の修道・無学道もより綿密に分析されてくるが、そのことによって原始仏教では明確でなかったことが幾つか新たな問題として出てくる。一つは先にも少し触れた阿羅漢の退・不退の問題であり、一つは修道における遅速の問題である。有部ではこれらの原因を機根（特に慧に比重を置いた能力）の上を求める。鈍根の者は修所断の煩惱を断じ難く、阿羅漢果を得ても再び煩惱が生じてそこから退する可能性があると考えられる。このことは、有部では、鈍根の者の資質は見道以後の修道・無学道において障害とまではならないとしても、少なくとも好ましいものではないと見なしていたのではないかと思われる。鈍根・利根ということが影響するのは見道獲得までではなく、それ以後なのである。『阿毘曇心論』において随信行と随法行と見道とが同一相であると断言されているのはそのことを示唆しているように思われる。そして鈍根の者は随信行↓信勝解 (śradhāḥā dīrghatā) 有部の完成した体系では信解脱という語を使用せず専らこの信勝解という語を用いる。これには幾つかの理由が考えられるが今は言及しない。↓退する可能性のある阿羅漢と進み、利根の者は随法行↓見至↓不退阿羅漢と進んでいくことを考え併せると、鈍根の者とは『集異門足論』などで述べられるような信の資質に富んだ者であって、その資質は修道や無学道においては好ましいものとは思われていないようである。そこで、有部の修行体系の中に、資質をより好ましいものに変える練根という考え方が導入され、体系全体が一貫したものになるのである。